

結婚を祝福する神 ～カナの婚礼

著者	原田 浩司
雑誌名	大学礼拝説教集
号	20
ページ	55-59
発行年	2016-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024647/

「結婚を祝福する神　　カナの婚礼」

大学宗教授任　原　田　浩　司

ヨハネによる福音書　第二章一―一節

1 三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。2 イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。3 ぶどう酒が足りなくなつたので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言つた。4 イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」5 しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言つた。6 そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあつた。いずれも二ないし三メトレス入りのものである。7 イエスが「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。8 イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行つた。9 世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知つて

いたが、世話役は知らなかったの、花婿を呼んで、10言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すのですが、あなたはよいぶどう酒を今まで取って置かれました。」ロイエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

二〇一五年の秋のある日曜日の午後、東北学院大学の卒業生が土樋キャンパスのラウハウザー記念礼拝堂で結婚式を挙げ、私が大学宗教主任としてその司式をしました。大学の礼拝堂は様々な用途に用いられますが、祝日など学生がいない日に、東北学院大学のOBやOGが結婚式を挙げる場所として使用されているのを、学生の皆さんにはあまり知られていないのかもしれませんが、皆さんも卒業後に結婚することになったら、この礼拝堂で結婚式を挙げることもできるということを、頭の片隅にでも入れておいてください。

さて、わたしたちの視点を本日^{この日}の聖書に戻していきましよう。先ほど読んだのは「カナの婚礼」という結婚披露宴を舞台にした物語です。どういう事情があったのか分かりませんが、イエス・キリストは弟子たちと結婚の披露宴に出席していました。今日の日本人の披露宴でしたら、2〜

3時間ほどですが、当時のユダヤ人の結婚の宴会は、数日間もかけて祝われていたそうです。そうして長々と続く宴会の途中で、ストックしておいたぶどう酒が全部飲み干され、切れてしまった。その時、イエス・キリストの奇蹟によって、水がぶどう酒に変わり、喜びの宴が滞りなく最後まで行われた、というエピソードです。ヨハネによる福音書では、イエス・キリストが公の生涯で、はじめて奇跡の業を表し、神としての栄光を明らかにしたのが、結婚式だったことが示されています。病人をいやすとか、嵐を鎮めるといった、現代科学では解明できない不思議なことが福音書には書かれています。ヨハネによる福音書では、イエス・キリストが行った最初の奇蹟が結婚にまつることだったというのは、意外に知られていないかもしれません。

結婚の披露宴の陰で、水をぶどう酒に変えた。そんなのあり得ない、ばかばかしい。皆さんはこの箇所を読み、条件反射的にそう思うかもしれません。ですが、もう一度この奇蹟が起きた時の状況をじっくり見詰め直してみましょう。イエス・キリストが変えたぶどう酒が宴会の席に運ばれた時、そこで楽しんでいる人たちは誰ひとり、それがどのようにして自分たちのテーブルに運ばれて、集まっている人々に振舞われているのか分かっていませんでした。宴会の世話人ですら、二章一〇節で花婿に対して「誰でもはじめに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すのですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」と言っています。

実はこの見当違いの言葉の中に、今日わたしたちが聴きとるべき聖書のメッセージがあり、この婚礼の奇蹟の意味があると言えます。

聖書が伝えようとしているのは、本当に「良いもの」はどこから来るのかということです。本当に良いものは、主イエス・キリストの元から来る、主イエスによってもたらされるという、単純明快なことをストレートに伝えています。この聖書が記す婚礼では、結婚したカップルも入念に準備して、結婚式の日を迎えたと思います。しかし、宴の途中でぶどう酒がなくなってしまうというハプニングが起きてしまいました。おそらく結婚したその日から誰が悪いの、どっちのせいだ、と口論が始まりかねない場面です。結婚には、いや正確には結婚してからの人生は、思い描いた計画通りに行かないことが噴出てきます。自分にとってこれがいいただ、自分たち二人にとってこれがいいただと思つて、様々なことに取り組み、実行します。しかし、この聖書は、自分たちの想定を超えて、本当に良いものは、実は神の元から来るのだということを伝えるのです。わたしたちの思いや知恵には限界があります。まったく思いもよらないハプニングや予想もしなかった手違い等で狂い出した時に、その限界は露わになります。しかし、そのただ中に、主イエスは「本当によいもの」を、わたしたちに備えてくださる。それがわたしたちにとっての本当の奇跡です。

結婚式では、新郎と新婦が、緊張しながら真剣に誠実に、互いに愛し合い、互いにいたわり合うことを誓い合う場面は、とても感動的です。しかしそれでも、なぜ結婚式が昔から教会で行われてきたのかを考える必要があります。互いに愛を誓い合う結婚という場において、愛を完成するのは、その二人ではなく、結婚式の司式者でもなく、神です。聖書は、愛は神からわたしたちのもとに来ることを伝えます。ヨハネの手紙は「神は愛である」と、神が愛であり、愛そのものであると伝えます。結婚式というのは、そういう意味でも、愛を完成させる二人が主人公であるというよりも、愛である神が、その愛をもつて二人を一つに結ぶ主役であると言えるでしょう。二人を結ぶのは、確かにそれぞれの愛や努力が必要です。しかし、聖書が示すのは、神の愛です。愛を完成させ、本当に良いものをもたらしにくさる神こそが結婚の土台となり、最終的な基盤となるのです。それがキリスト教会の結婚式だと言えます。

これからの皆さんの人生で結婚を意識する時、東北学院大学で養った精神を思い起こしていただきたいと思います。神が結婚を祝福し、皆さんの思いを超えて、本当に良いものをもたらしにくさる。それが東北学院が拠って立つ信仰です。